17年　1月　14日

環境・生命工学専攻	学籍番号	005044
新政者氏名	Le Roux, Pieter Christiaan ロル・ピータ・クリスチャン	

指導教員氏名	加藤彰一 渡邉昭彦

論 文 要 旨 （ 博 士 ）

論文題目	APPLICATION OF A MODEL OF WORK STYLE TYPOLOGY ON ASPECTS OF AUTONOMY AND DIVERSITY IN WORK PERFORMANCE IN OPEN PLAN OFFICES ・ A Study on Predictive Facility Management オープンプランオフィスでのワークパフォーマンスの自主性と多様性に対するワークスタイルタイポロジー・モデルの応用 ・ 予測的ファシリティマネジメントに関する研究

オープンプランオフィスは国内で最も多い形式であり，その活用は重要課題である。本研究はオープンプランオフィスのファシリティマネジメントに関して，ワークスタイルとオフィス環境との対応関係を対象とする。ファシリティマネジメントは，1970 年代に米国で生まれた施設の活用に関する経営手法であり，1980 年に国際ファシリティマネジメント協会（ＩＦＭＡ）が設立された。国内では 1987 年に発足した日本ファシリティマネジメント推進協会（ＪＦＭＡ）が 1996 年に社団法人化され，各国で専門の職能・学術団体が設立される中で，2001 年には筆者の祖国である南アフリカ共和国においてもＳＡＦＭＡが発足している。また，近年，文部科学省文教施設部は「施設マネジメント」という用語で「ファシリティマネジメント」の普及・発展の必要性を提唱している。本論文はこうした要請に沿ったものである。

第１章は，研究の背景と目的を述べ，ファシリティマネジメントが生まれた米国環境デザイン研究領域や人間－環境関係学におけるＢＰＥ（建物性能評価）法とＰＯＥ（使用開始後評価）法に関する既往研究に言及して，本研究の位置付けを行っている。

第２章では，国内で代表的なオフィス性能評価法であるニューオフィス推進協会ＮＯＰＡミニマム規格に注目し，米国シンシナティ大学 W.F.E. プライザー教授が指導するＩＢＰＥ（国際建物性能評価）プロジェクトの評価手法と対比して，岐阜県ＶＲテクノプラザに関する事例評価研究を行い，北米のＡＳＴＭ規格との比較分析から，性能評価手法の枠組みを明示し，空間的快適性の重要性を示した。

第３章では，空間的快適性に注目し，プリーアドレス方式など新しいオフィス事例（名古屋ＪＲタワーズ内コクヨ社オフィス）を対象として，ワーカーの動きやコミュニケーションのパターンをマッピング調査から把握した。得られたデータから，ワーカーの在席率や在室率，コミュニケーションの場所，動線の範囲などを指標として抽出した。既往研究を基に定義したワークパフォーマンスの自主性と多様性から，業務の特性を個別作業，チーム作業，集中作業，ナレッジ業務という４分類としてまとめ，先の調査分析指標との関係から，Circuital（周期的），Axial（軸即的），Areal（領域的），Diffusive（分散的）という４つのワークスタイルを示し，タイポロジー分析を行い，業務の特性やコミュニケーションの範囲，動線の範囲などを総合する分類として，ワークスタイル分類の意義を示した。

第４章は，より一般的なオフィスである東京アウディ本社オフィスおよびアネックスオフィスを対象とし，上記のワークスタイル分類法を確認し，ワークスタイル分類別のワーカー数を算出し，必要な物的環境との対応を示して，ワークプレースづくりにおける新しい方法論を提示した。

第５章では，将来のワークスタイルの変化と多様化について方向性の把握に利用できるワークスタイル発展モデルを提起し，評価から計画へと展開する一連の方法論を予測的ファシリティマネジメント・モデルとして論述することから，先進的なワークプレースづくりの方法論として提言を行っている。

第６章では，本研究を総括している。